

22年プロ野球、長野県出身選手の活躍

上原 昇（2組）

10月3日、プロ野球はセ・リーグのヤクルト対DeNA戦を最後に、各チーム今年予定されていた全143試合が終了した。リーグ優勝はセがヤクルト、パがオリックスと昨シーズンと同じ結果に終わった。

3日のセ最終戦では、ヤクルトの村上宗隆選手が日本人選手としては過去最多の56号ホームランを放ち、三冠王獲得と合わせ日本中の野球ファンを沸かせた。

プロ野球はこれから、クライマックスシリーズを経て、10月22日から日本シリーズが開幕し、日本一が決まるのは10月の終わり頃になる。

当HPで、筆者は長野県出身選手の活躍について何度かレポートしているので、今シーズンについても振り返ってみたい。

開幕前のレポートでは、6人の長野県出身選手を紹介した。（22年3月28日付）

さて、彼らの今シーズンはどうだったでしょう。

まずは、昨年新人として大活躍した横浜DeNAベイスターズの牧秀悟内野手（24歳、中野市出身、松本第一高校から中央大、21年ドラフト2位DeNA入団）は、二年目のジंकスを吹き飛ばす活躍ぶりだった。打率こそ昨年を若干下回った（2割9分1厘で8位）が、本塁打（24本）、打点（87）は昨季を大きく上回り、二塁打36はリーグトップと立派な成績を残した。今年のオールスターゲームではセ二塁手でファン投票選出、侍ジャパン強化試合のメンバーにも選ばれた牧は、すっかり球界を代表する選手となり、今後の更なる活躍とタイトル獲得（村上がいるので首位打者狙い）が期待される。

【写真は牧選手】

続いて、埼玉西武ライオンズの水由伸投手（24歳、上伊那郡出身、帝京三



高から四国学院大、21年育成ドラフトで西武入団)は今季中継ぎとして60試合に登板し着実な結果を残し、最優秀中継ぎ賞のタイトルを手にした。こういう賞があることは新聞を見て知ったが、中継ぎで4勝4敗、防御率1.77という成績は地味ながら見事なものだ。

水上も今年のオールスター戦に監督推薦で初出場、初登板している。

なお、牧も水上も、これからクライマックスシリーズが待っている。



【写真は水上投手】

3人目の読売ジャイアンツの直江大輔投手(22歳、長野市出身、松商学園高校卒、19年ドラフト3位巨人入団)は、8月に苦節4年目でプロ初勝利を挙げた。直江の登板は今シーズン8回目で、この日の内容次第で今後のプロ野球人生の行方が左右される大事な試合であった。私もTVで観戦していたが、球にキレがありピンチでも動じることなく力投していた。ただ、その後は登板の機会が無くどうしたのか、来シーズンが心配である。



余談になるが、直江投手の父親の晃氏(54歳)も松商学園で投手として活躍した。

晃氏は春夏3回、甲子園に出場して松商では“伝説のエース”と呼ばれているらしいが、肘の故障でプロ野球には進めなかったとのこと。

【写真は直江投手】

他の3選手(詳細は略)は1軍出場の機会はなく、来年以降の活躍を期待したい。

(2022年10月5日記)

以上